





初めての方はどうぞ1冊目からお読みになって
くださいませ～。

[こちらです。](#)

【連載91】ふと蓉子がなにをしているのか気
になって捜す。会場には、女優やモデルであ
ろう、かなり容姿端麗な女性も多かったが、蓉
子は見劣りしないばかりか、圧倒的な存在感

を放っているせいですぐに見つかった。

【連載92】わたしの視線に気づいたらしく、蓉子がこちらへ歩み寄ってくる。わたし
もグラスを持って席を立つ。「パーティ、どうですか？」蓉子に尋ねられて、「ええ
、とても楽しんでいるわ」と余裕のある受け答えをする。

【連載93】しかし、不安な心中は全てtwitterに書きつづる予定なので意味のないことだ
と判っている。インターネットが出現して、人々はリアルに繋がりのある人間とネッ
トでやりとりもするし、ネットでやりとしてしてからリアルでつき合いもする。

【連載94】ただ、リアルとネットはやはりどこかで断絶したままだ。決してその世界
は同時に進まない。

【連載95】人は誰かと面と向かって喋りながら、例えばtwitterに書き込みをしない。最
近ではテレビに出演しながらリアルタイムで呟くような文化人も出てきているが、一
般の人間が実生活ではなかなかそれをできない。



【連載96】「～なう」というリアルタイムの
呟きがまさにtwitterの持ち味なのだが、わたし
はこれをパーティの最中に呟いているわけでは
ない。パーティが終わって部屋に帰った直後だ
。



【連載97】 少しずつのタイムラグが生じるだけでなく、書き言葉としての世界と、リアルは

どこかで世界をまたいで超えなくてはならない。

【連載98】 わたしはインターネットが実生活に食い込んでこればくるほどに、リアル世界と乖離してゆく文字だけの世界を、コントロールできないでいる。こんなことを呟いてしまっていていいのだろうか？というような際どいことを、敢えて選んでいる自分を、止めることができない。

【連載99】 紫藤の父である、アメリカの富豪のはからいでわたしのツイートを読む人間が一挙に増えた。大部分は、富豪が用意した翻訳アカウントをフォローしているが、日本語を読める者もどこかから沢山流入してきてわたし自身をフォローした。

【連載100】 翻訳アカウントを眺めてみると、驚くほどの正確さと早さでわたしのツイートを英語に置き換えてくれている。どう考えても自動翻訳ソフトの仕事ではなかった。現段階でこんなに性能のよい翻訳ソフトは存在しないだろう。

【連載101】女性誌と旅行会社の企画として始まったわたしのツイッターアカウントは、アメリカ人の富豪の周辺の、わたしにはおおよそ縁のない、ビジネスだとかアメリカの社交界だとかの世界の人間に読まれることになったのだ。

【連載102】翻訳アカウントは自分で管理できないので、翻訳アカウントをフォローした人間を、自分の本来のアカウントで全てフォローしてみた。自分のタイムラインの半分は日本語以外の言語で埋め尽くされた。

【連載103】英語だけでなくスペイン語やらフランス語もあった。世界中の人間がそれぞれの時差の中で、それぞれ呟いている。そしてそれらの呟きに紛れ北緯18°、西経154°辺りからわたしの旅日記が綴られている。ハワイは朝を迎えようとしていた。

【連載104】夜更けに部屋に戻り、酔いを覚ますためにキッチンで珈琲を淹れて、それからずっとtwitterで呟きを投稿しつづけていた。翻訳アカウントは律儀にそれを英語に訳しつづけていた。眠らないで呟くわたしと、どこかでそれを英訳する「なかの人」。

【連載105】パーティでは、あの後、蓉子もまた違う人の輪に入っていき、わたしも幾つかの会話に参加して、途中で疲れたとってひとりで出てきた。蓉子に断ってから戻ろうかと思ったが、ちょうど見あたらなかった。携帯のメール宛てに帰る旨を伝えてわたしはペントハウスを出た。

【連載106】深夜のリゾート内は漆黒の闇に包まれていた。所々に誘導灯がついているが、濃い闇に萎縮したような弱々しい光でしかない。どこかから獣の吼えるような声が、低く、間断なく続いている。風がやんで空気がもったりと重かった。

【連載107】南国の野生がむき出しになってわたしを威嚇している気がした。人工のリゾートのなかで薄められているものが、夜になって息を吹き返したのだと感じた。わたしはなにものをも刺激しないように息をつめるようにして足早に部屋に帰ってきた。

【連載108】 部屋に帰ってきてからずっとパソコンに文字を打ち込んでいた。パーティの最中のリアルタイムなツイートにはならないが、ひとつのツイートを書いた瞬間Web空間に放っていく。わたしの心情としてはリアルタイムなアップロードといえた。

【連載109】 例えばパーティの夜について、全てのツイートを書き終えて全体に整合性があるかないかを確認めたりしてからアップしていったほうが作品としてまとまったものになるだろう。でもこれはなんといってもtwitterなのだ。Just nowが綴られるべき空間だ。

【連載110】 誰かがわたしのtwitterの眩きを期待しているわけでもない。日々、夥しく生まれるtweetのひとつとして読まれ、次の瞬間ほとんど忘れ去られてしまう。タイムラインは滝の如く流れ落ちてゆく。そのスピードを一体何の早さとして受け止めるべきだろう。



【連載111】ふと気がつく、外がうっすらと白んできていた。海は恐ろしく透明度が高かった。底が透けて、泳ぎ回る魚たちのすんなりとした筋肉が見えそうだった。わたしはハワイではラナイと呼ばれるベランダに出てみた。

【連載112】空気が冷たくて寒いくらいだった。ふとわたし自身について書いてみたい誘惑に

かられた。こんなことは初めてだ。なにかを書き始めてからも随分時間が経つが、わたしは周到に注意深く自分のことを避けて書いてきた。それは慎みという種類のものではなかった。

【連載113】そもそもなぜ文章を書くことを続けてきたのか。売れっ子の作家などにはこれまでも、これからもなれるわけではないと自分を客観視しながらも、それでもなお、しがみつくようにして書くことを続けてきた。

【連載114】しがみつくように、いや、齧り付くようにと言ってもいいかと思う。主婦が片手間に気楽な雑文を書き散らしていると思われることは承知だった。けれども、書きたいと願うこの欲求は、なにかそういう軽薄なものだとはどうしても思えないのだった。

【連載115】その書きたい欲求は、自分の過剰で誇大された妄想みたいなものだとは自嘲してごまかすことはできなかった。ごまかして放っておくのは、自分だけじゃなくて、もっと「書くこと」の根源にあるものに失礼だという気がした。



【連載116】とはいえ、自分の壮大ともいえる誇大妄想を書き連ねたようなものは、今まで出版されることもなかった。日々の細々したことを書き連ねた雑文ならば時々女性誌などに掲載してもらうことができた。それによる原稿料は微々たるものだった。



【連載117】 しかしその仕事をなくすと自分の存在意義に関わるようでやめられなかった。

【連載118】 そしてわたしはそこでノートパソコンをいったん閉じ、シャワーを浴びてから Cotton のホームウェアのようにラクな洋服に着替えて外へ出た。まだ闇の領域が残存する朝の時間をそろりと歩きだす。

【連載119】 最初から鳥の鳴き声がしていて徐々にそれが高まったのか、それとも今この瞬間にそれが始まったのかわたしにはよく分からない。とにかくオワフ島の鳥という鳥が一斉に囀りはじめたのではないかという音量の鳥の鳴き声が聞こえはじめた。

【連載120】 荘厳な音楽のように鳴き声が続いて、ふいに途切れたかと思うと、熱帯の光があふれるように照りつけて、一挙に本物の朝が訪れた。わたしは祝福されたような心地でリゾートの中を歩く。濃い珈琲が飲みたくて、ハワイに到着した朝、紫藤を見たカフェに足を運んだ。

続く。

続きはtwitterで連載中です。

アカウントは @makeanovel です。お気軽にフォローを～！